

石井公成（監修）、近藤俊太郎・名和達宣（編）

『近代の仏教思想と日本主義』

法蔵館、2020年9月刊、A5判、556頁、6,500円

オリオン・クラウタウ（編）

『村上专精と日本近代仏教』

法蔵館、2021年2月刊、A5判、349頁、5,800円

大谷栄一・大友昌子・永岡正己・長谷川匡俊・林淳（編）

『吉田久一とその時代』

法蔵館、2021年3月刊、A5判、532頁、5,000円

谷川 穰*

1. はじめに

掲題の書籍について、筆者は本誌編集委員からそれらを3冊まとめて論評するよう求められた。率直に言って、その意図をはかりかねた。合わせて1,500頁に達しようかという代物である。研究史的整理も折々なされ、多くの専門家たちが特に思想・言説の研究でもって多彩に議論をしている、そんな近代仏教研究の「盛り上がり」に特に貢献しているわけでもない者には、とても手に負えないことはすぐに察せられた。だが、それは明治以降の仏教に多少絡む歴史研究らしきことをほどこにやるだけの不勉強なお前にとって意味ある営為だ、そもそもご恵与下さった各編者の方々のご学恩に報いるべきだ、との自分らしからぬ思いもよぎり、また昨今の近代仏教研究に対して何か興味深い事柄が提唱できるかのような委員氏の慫慂もあって、引き受けるに至った。

しかし結果として、上述の察知はいくつかの意味で正しかった。「分を弁えよ」という懺悔の声が響くなか、いくらか所感を綴ることで責めを塞ぐことにしたい。まず3冊それぞれに対する評を行い、その後全体にわたって感じられた事柄を記す。紙幅の関係上、全ての内容に触れることは到底できないが、近代仏教研究における学術的意義をいずれにも認めた上でのコメ

ントであること、予めご諒解願いたい。

2. 各書への論評

2-1 『近代の仏教思想と日本主義』について

本書は、昭和戦前期およびアジア・太平洋戦争下を生きた仏教者、そして仏教に関心を寄せた知識人・思想家が、「日本主義」にどう際会しどう読み替えていったのか、その諸相を探った論文集である。編者は、単に戦時に抵抗した人々を称揚するのではない視座に立ち、「仏教思想はなぜ日本主義に回収されたのか」（序v頁）を考えたいという。そこには、親鸞思想の近代的系譜をたどるなかで浄土教に国体論との連続性があると指摘した中島岳志の近業〔中島 2017〕が起点になった、とも記す。構成は三部に分かれ、まず総論に監修者による「日本主義と仏教」を配したうえで、第I部「親鸞・聖徳太子」は曾我量深、梅原真隆、金子大栄、原理日本社、三井甲之らが、第II部「日蓮・禅」では田中智学、東亜連盟、鈴木大拙、関精拙、市川白弦らが、そして第III部「教養・修養・転向」では暁烏敏、亀井勝一郎、吉川英治、京都学派、佐野学らが扱われる。「戦時協力」「右翼」の一言で済ませない当該期の思想研究は近年、それなりに蓄積されてきたが、本書もまたそこに連なり、多くの事例を一書にまとめ山並みを眺める点に特徴があろう。とくに大竹晋「臨済宗

* 京都大学教授

と「日本精神」、飯島孝良「禪・華嚴と日本主義」は従来の近代仏教研究では扱われることの少ない宗派にも光を当てている。

そうした山並みも当然形はまちまちであり、どう眺めるかも読み手に委ねられている。その点で気になったことを述べておく。本書には、上述の中島に対する批判から議論を展開する章もある。たとえば真宗大谷派の教学以外に妥当するのかと問う内手弘太、親鸞一本居宣長—国体論という論法の強引さを検証した齋藤公太の章がそれに当たる。これらの章を、編者はどう位置づけたのだろうか。中島に批判的立場をとる人も、逆の立場の人もいる学問的アリーナをそのまま提示したことはわかるものの、編者は中島に対して、議論の口火を切った存在としての賞賛以上には何も語らない。そして、最後の「まとめと展望」でも特段その点は述べられることなく終わっている。当の中島が本書に別途論考を寄せているだけに言及を避けたのかもしれないが、山並みを歩いた結果として、あらためて編者なりの考えを知りたくなったのが正直なところである。

次に、「日本主義」とは結局何だったのか、という点である。本書では、昆野伸幸が示したような「日本主義」の暫定的な広い定義、すなわち「国粋」「日本精神」などの語を通じて日本の伝統の価値を重視し、更に発揚・保存・復活を期しつつ現実の諸問題に対処しようとする主義主張、という「最大公約数的」な捉え方〔昆野 2013: 337–338〕に即して多様な言説を扱っている。ただ、「日本主義」はそもそも曖昧な語ではあるが、昆野は明治20年代以降段階を追って丹念に考察した結果をもとに、同じ論考内で次のようにも再定義している。日本主義とは、日本の歴史の淵源に神や神代を据え、日本人に先天的な自然性（「国粋」「日本精神」など）に依存する一方、それを阻害する要因（キリスト教やマルクス主義など）の蔓延を憂いて反日本的と判断した思想を不断に攻撃・排除し続ける思想である。戦時期には「国体」の危機克服に努

めた国民の主体性を重視し、神話を相対化するという新しい日本主義のあり方も提唱され、ともに「国体」への奉仕を求めるより強い抑圧として作用した、と〔昆野 2013: 366–367〕。皇国史観も祖上にのせ鋭く分析したこの昆野の指摘を、本書はあえて無視しているふしもある。総論で監修の石井は「日本主義は戦後社会に生きる我々自身の問題であり、過去の事象ではない」（38頁、傍点谷川）と言い切る。「何だったのか」と〈過去化〉することへの警鐘とかみしめるけれども、本書各章が時代限定的に（もっぱら昭和戦前・戦中期の）日本主義を扱った以上、時代的特質に敏感に斬り込んだ昆野への学術的応答も、やはり求められるのではなからうか。

また、「日本精神」という語を章題に用いたものも二つある。上記の最大公約数的定義からして、そのことは特に意識されていないようである。だが「日本精神」は、安岡正篤の影響から1930年代に入りには確かに社会的流行をみた言葉であり、1933年に政府の思想対策協議会において思想善導上の目標・用語として定立され、それを踏まえ内務省・文部省・陸軍省がそれぞれの政策に利用した言葉でもある〔越川 2016〕〔鷺澤 2022〕。そこには「日本主義」のサブカテゴリーのようでズレのある、特別なニュアンスがこめられていたということはないのか。当時のその人物の言葉として、「主義」でなく「精神」を用いた含意は何であったのか。誰のどんな史料を扱っても「これは日本主義に向きあったもの」と際限なく読めてしまう危険性を回避するには、また信仰や心に向きあう仏教者を扱うならばなおさら、この種の語用の差異からも解くべきことが多そうに思われる。

あえて問えば、「日本主義」者ではない人、あるいは「日本主義」に対峙しなかった知識人はいたのだろうか。表向き「日本主義」への態度を言明しなかった人は、本書ではどう位置づけられるのだろうか。要するに発言できた知識人は、何であれ対峙しえた人として後世に残るのかもしれない。しかしそうでない人は、対峙

したかしくなかったかと、どう弁別されるのだろうか。この点はとりもなおさず、総力戦体制が形成されてゆく時代、そして戦時という特定の歴史的時期を生きた人々のあり方をどう捉えるのかという点と関わる。黙した人々、無視しようとした人々、あるいは何か別の形にその対峙をしのばせた人々も現実にはいたわけである。それはある危機の時代に自分が何をなすべきなのかを問う編者たちの関心の範囲だろうし、そのための方法をどう考えるかも課題であろう。またそうなれば、改めて「抵抗者」をどう捉え直せるのだろうか。「日本主義」に絡め取られる様子をたどるほかないとして、その後自らに何が残り、未来をみうるのか。編者および執筆者たちはそのことを明示しないけれども、短慮な身にはそれが気になり、省みもした。

2-2 『村上専精と日本近代仏教』について

村上専精は明治・大正期において仏教史研究を切り開いた重要人物であり、まさしく近代仏教史上の人であるが、十分に研究されてきたとは言えない。編者は村上の「大乘非仏説」ばかりが強調されて全体像が明らかでなかったこと、史料面でもあまり探究されていなかったことを理由に挙げ、その克服を図るとして本書を編んだという。確かに村上専精研究の現在がわかる書籍としてまず受け取ることができ、村上の生涯について眺め、時に深く掘り下げ、多くを学ぶうる。ただ、本書には別に書評は必要なさそうにも思われた。意味のない本だと言いたいのではなく、実はすでに本書の中でなされているのである。終章に配置されている林淳の論考が、それまでの各章および本書全体への論評と、質疑という役割を全面的に担っている。

論評はそれぞれの確で繰り返さないが、質疑で挙げられたことは二つあった。一つは「村上における持続と変化」はどう把握すべきか、つまり村上の生涯の初期（第I部）と、20世紀初頭に『仏教統一論』第一編を上梓したあとの時期（第III部）とが手薄であること、排耶論や国民道德論の持続・変化から再度時期区分をす

るとしても、単に村上だけを見ていてもわからないこと。もう一つが、村上の僧籍剥奪に関して、そこに白川堂事件以来の真宗大谷派と村上との複雑な関係が存在しており、近代大谷派教団内の歴史という村上個人を超えた問題を探求する必要があること。林は本書の「村上論」としての成果を前向きに示すとともに、近代仏教とその時代を論じねばならないと説くのである（264-266頁）。

では編者はどう応答するのか。と思ってページを繰ってみても、それに答える箇所はない。非常に詳細な著作年譜と若干の史料翻刻が掲載されて終わっている（むろん、それらは有益であるが）。なるほど、各所で開かれる書評会などで暫定的な応答を試みたくえて、編者が林のアドバイスを重要な提起として踏まえ、それらの力を借りて近く研究を個人的にまとめようというわけなのだな、と得心した。実際、編者は「林の提言を含め、本書が専精研究をこれで完結させるものでは決してなく、むしろ、今後の研究の可能性を示す」（vii頁）としつつ、自身の執筆した章でも「彼〔村上―注谷川〕を軸とした「近代日本仏教思想史」を描いてみたい」と述べて稿を閉じている（199頁）。近代仏教研究の盛り上がりを担う編者の力量が発揮された本書は、一つの（共同）研究の展開過程を見せる手法という点からも、興味深く思われた。

ついで、内容面で気になったことを多少述べておきたい。序章のミシェル・モール論文は、「若かりし頃に身に付けた儒学の素養に注目しなければならない」（6頁）と指摘する。しかしそれは指摘にとどまる。となれば初期の思想を扱う第I部の二論文に示されるのかと思いきや、排耶論や因明学に焦点が絞られて、結局はわからずじまいであった。それは、両章の執筆者がそれを放置したということなのか、あるいは別の要因を読み取るべきなのだろうか。明治期における僧侶自身の学問的自己形成を村上から見いだそうというのは、読み手の「ないものねだり」でもないように思われるが、どうだろ

うか。また、第五章で村上の『仏教統一論』を扱ったライアン・ワルド論文（2005年に公表された論文を日本語訳して再掲）がその深化の必要性を提起した教団側の研究も、林も示唆したように、本書では結局なされていないようである。第三・四章も同じ『仏教統一論』を中心的な素材・起点とした論考だったが、その点に光を当てることはなく、ワルドの提起は15年経ってもなお無視された格好に映る。

他方、史料面での問題。どの章でも用いられる村上の回顧録『六十一年——名赤裸裸』が、彼の生涯を知る上で重要なのはよくわかる。ただ、そのまま文面通り受け取ってよい史料なのかは、生涯を通覧した本書ならば一言あって然るべきではなかろうか。いうまでもなく、一般的に回顧録は、書かれたその時点での筆者の立場を色濃く反映しているテキストであることが多い。もっと他者がみた村上、あるいは村上自身の残した私文書（書簡や日記の類）から、批判的に読み解く余地はないのだろうか。それを経た上での考察なのかどうか、そのあたりの留保や言及が一切ない点は、門外漢の読み手としては不安なしとしなかった。

なお第八章の池田智文論文で扱われる『明治維新神仏分離史料』編纂をめぐる村上と辻善之助との関係は、たいへん興味深く思われた。近代仏教史の起点は、彼らが編んだ同史料集によって学術的にも決定づけられた。「廃仏毀釈の嵐」はこの『分離史料』によって浮かび上がられ、これを積極的に用いた安丸良夫『神々の明治維新』によって後年確定させられた面が大きいと言ってよい。その史料編纂の過程は同章で注記された原稿類のほかに、書簡や日記からも垣間見える。例えば辻宛ての村上書簡には、日本学士院で神仏分離関係の史料調査報告を一部分でもいいからしてほしい、辻の上司である三上参次も了承しているから、と依頼する村上の姿が（1924年4月11日付、姫路文学館所蔵「辻善之助文庫」、登録番号39-L0-005216）、逆に村上宛ての辻書簡には、辻が仕上げた解説

「神仏分離の概観」の校正刷りを送り序文執筆を村上に促そうとした様子（〔1925〕年12月17日付、同前、登録番号39-L1-000131）がみえる。また日記には、辻がもう一人の共編者となった鷺尾順敬とともに村上宅を訪れ、『分離史料』の刊行広告を目にした福井県平泉寺村の村民から平泉寺の調査漏れを指摘された旨を伝えたこと（1926年2月8日条、同前、登録番号39-05-000032）など、紆余曲折の様子も窺える。村上と辻、そして雑誌『仏教史林』でともに仏教史像の形成を試みた鷺尾との相違についても、公刊されたもの以外の史料にも十分目を配ることで、より鮮明に、また異なる様相も含めて描きうるはずである。

2-3 『吉田久一とその時代』について

吉田久一（1915～2005）は、直近の過去、あるいは同時代史として近代仏教史、そして近代社会事業史・仏教福祉思想史研究を開拓した、戦後日本における第一人者である。それらの分野の研究者や吉田に師事した者らが執筆した16本の論文と4本のコラムによって、自身が「草取り学問」（8頁）、「荒野の草刈り」「白地図をつくる」（66頁）と称した、その生涯と研究・教育のありようが多角的に紹介・考察されている。

私などは、もっぱら近代仏教史研究の主著『日本近代仏教史研究』（1959年）・『日本近代仏教社会史研究』（1964年）から、また沖縄（八重山）戦従軍経験者として、吉田をイメージしてきた。だが本書では、社会事業史や社会福祉史研究にこそ生涯の関心を見ようとする論考（大友昌子、元村智明、岩崎晋也ら）、そして戦後沖縄（宮城直子）、上記著書の同時代的前提にあったアジア情勢とナショナリズム（石井洗二）、さらに戦前期満洲・朝鮮キリスト教社会事業史という未完の課題（永岡正己）など、「日本近代仏教」にとどまらぬ吉田の旺盛な研究の軌跡がたどられている。

個人的には、同じ社会福祉史の研究者・池田敬正との比較（今井木の実）から感じるところがあった。明治維新に関心を持ち『坂本龍馬』

の著作などもある京大國史学出身の池田が、どう問題意識を広げ社会福祉への関心を鮮明にしたのかという点も、興味がある。だがそれ以上に、池田がウェーバーを念頭に、社会科学としての福祉学の確立に貢献すべく福祉の人類史的段階論設定にこだわった（316頁）のに対して、吉田は普遍的な福祉理念の追究から距離をとり、福祉の発展を評価する軸を持たなかった、との指摘（322頁）が重要と思われた。本書の林淳論文では、吉田による近代仏教史の時期区分を自身の旧稿を修正しつつ、時期区分の大枠とそのなかに仏教者による多様な事績が格納された吉田のその区分⁽¹⁾を子細に検討し、『日本貧困史』など吉田の社会事業・福祉の通史的研究における区分との違いにも及んでいる。だが今井は「吉田の通史」を「時期区分は設定できても段階論に踏み込めない」（322頁）とし、個別の福祉実践の検証から普遍的価値を見いだす方法にとどまったとする。つまり、林や本書編者でもある大谷栄一らがしきりに論じるような、近代仏教研究の時期区分および学史整理の問題と、社会事業・福祉史研究におけるそれとでは、今井のいう「段階論」という構え（の有無）において違いがあるようである。

大谷は本書でも「批判的再検討」の対象として吉田を学史に位置づけようとしたように、ある種「近代化論」的な吉田の近代仏教史像のありようを乗り越えるべく、「近代性」の重視、「近代」の語り直しへと価値転換した歴史像の構築をつとに提唱してきた〔大谷 2012：13-41〕。他方今井はおそらく、丁寧な時期区分や学史整理という観察を踏まえつつも、それを乗り越えてどのような歴史的「段階」とその先を論じる考察ができるのか、と問うている。「近代化」か「近代性」かといった議論を呑み込むかのような構えに、仏教史研究として対峙することを迫ったように感じられたのであった。

明治改元（1868年）からアジア・太平洋戦争終戦（1945年）までの期間と、そこから現在（2022年）までの期間がほぼ等しい長さとなっ

た今、そしてこれほどに史料探索や実証の水準が上がり、歴史研究の方法論、何より価値観や目指すべき社会の課題が多様に広がっている今、吉田の「草取り」ではなしえなかったことを指摘するのはおそらく簡単である。たとえば『日本近代仏教社会史研究』は事績を多く掘り起こしたけれども、その紹介・列挙する叙述をもって「実証的」と評する段階はもう終わっているだろう。吉田を清沢満之同様の歴史上の人物にし去り受け流す（碧海寿広）というのも、一つの立場なのかもしれない。ただ吉田を批判的にであれ継承するというのならば、なすべきは本書執筆者をはじめ各研究者がそれぞれの時代の幅で、あるいは細密さでもって、今を生きる時代感覚に即しつつ考察を深めていくこと、その結果吉田の切り開いた領野を再吟味しうだけのスケールを図らずも持つに至ること、しかないであろう。陳腐な物言いかもしいが、再度その点を確かめるほかない。

その点で、今後の近代仏教研究には戦後史の探究と、むしろ近世から近代へ移行する時期への再検討をなしていくことが肝要と考えられる。意外と後者は難しいはずである。仏教において時代の断絶が明確に「明治初期」にあると見られてきたこと、日本史研究における近世史と近代史の没交渉（および「幕末史」「明治維新史」の固有領域化）もあってその点の再検討に及びづらいこと、そして活字史料とそれが豊富な時期に目を向けていくほうが研究論文もまとめやすく「言いたいこと」が早く書ける（と思われるがちな）ことも一因であろう。かつて明治維新にあると考えられてきた〈現在〉の日本社会の起点は、第一次世界大戦、アジア太平洋戦争における総力戦体制、そして高度経済成長と、どんどん時代が下っていく。それは当然のことである。それゆえに、よほど意識していないと、近代社会成立期の深みから今の世の中まで大きく捉える感覚は薄れていくように思われる。

3. 全体的に思うこと——続く／盛り上がる／黙す

ここまで1冊ずつ取り上げていくばくか述べたが、それらは他の2冊にもある程度通じる問題とも言える。したがって全体についての所感、不十分ながら申したことになる。

課題を残しながら、また次の共同研究・論集を盛り立てていく。「これからも続く」(『近代の仏教思想と日本主義』554頁)と期待させる形式が「盛り上がり」を支えているのだと(そのうち法蔵館などからまとめて出る、という力強いスクラムもあるか)、そうやって日本近代思想史研究における仏教という要素のプレゼンスを高めていくのだと、得心したのも確かである。学祖ともいべき吉田ら「大人」たちがいて、強力な応援団がいて、時期区分や学史整理に果敢に挑む先行者がいて、学問的アリーナがより開かれ、土台が築かれた。いまや〈安心して〉近代仏教研究ができる。しかし、そこに甘えてはならじ、という思いにとらわれるのは、そのただなかで取り組んでいる人々——つまりこの三書に執筆したような近代仏教の研究者たちなら、誰しもがそうであろう。だからこそ、石井公成や林淳といった懐深き大物研究者に総論や総まとめを委ねた『日本主義』も『村上』も、編者自身がその書物の中でなすべき一定の応答を回避し、先送りしてよかったのだろうか、と思わされたのである。

具体的な贅言を付け加える。吉田久一の社会事業への関心は、教団の「外」での活動にこそ着目すべき、という近代仏教史像の基調とも不可分の関係にあったと思われる。この点に関して林は、吉田が「教団仏教」に「あるべき近代仏教」が抗い批判しえた、という近代仏教史のストーリーを「吉田が見たかった夢」であったと指摘する(『吉田久一とその時代』235頁)。それは、真宗出身の僧侶たちがリードして展開していったという近代仏教史像の確立・維持につながり、近代の教団や寺院の「内」に向ける

関心を薄れさせてもいっただろう。これは先述の通り、『村上』の問題にもつながる。また『日本主義』でも「教団組織の動向を丁寧に跡づける作業は今後の課題」(序vii頁)とする。公開が進まない、いや進んだとしても読み解く手間や労力がかかる教団内部の膨大な史料群に手をつけて、わずかばかりの事実を積み上げていくこともやはり、避けがたい課題であろう。盛り上がらない面倒な草取り作業も、黙して重ねなくてはならない。

——なるほど、そういう戒めを私に与えることこそが、委員氏の意図であったか。黙して頭を垂れ続けるのみである。

註

- (1) なお林は、吉田の明治期以後の時期区分を大正・昭和戦前期・戦後と「安易に…元号に依拠」したものと評する(『吉田久一とその時代』224頁)が、天皇代替わりの「御大典」に伴い各教団や関係組織による社会的事業がなされた事実や、吉田自身の「大元帥」昭和天皇に対する位置づけも関わってくるように思われ、「安易」としていいのかどうかは議論の余地もあろう。

参考文献

- 昆野伸幸 2013「日本主義と皇国史観」『日本思想史講座4 近代』ぺりかん社、337-373。
- 越川求 2016「『日本精神』による思想・文化・教育の動員枠組みの確立—長野県「二・四事件」の時期における内務省警保局の役割に焦点をあてて—」『立教大学教育学科研究年報』59: 59-74。
- 中島岳志 2017『親鸞と日本主義』新潮社。
- 大谷栄一 2012『近代仏教という視座』ぺりかん社。
- 鷺澤遼祐 2022「1930年代における『日本精神』認識とその政治利用—思想対策協議会を起点として—」2021年度京都大学大学院文学研究科修士論文。